

Significance of co-education for university students to learn together with children with intellectual and developmental disabilities through support for nature experience activities

WATANABE Kanae

Experience-related disparity has become a serious problem among children. In particular, children with disabilities may get very restricted chances to study through experiences. To eliminate such disparities, a project involving seaside nature experience activities for children with developmental and mental disabilities was implemented with governmental support. The project was very well received by parents and staff members at a children's care center, and they wanted to continue the project. However, because of cessation of governmental support, the project had to come to an end. Support provision for disabled children's activities requires a greater amount of resources –not just economical but also human– than that for normal children. However, it was difficult to secure enough volunteer supporters for this project. We felt that one solution for this issue could be recruiting university students to perform volunteer work as part of university education. This study aimed to verify what “co-education of children and university students” in the university curriculum should be and examined how university students and children with developmental and mental disabilities could learn and grow together through nature experience activities by comparing the results of a questionnaire that was administered to volunteers with no or little experience, volunteers with experience, and staff members at a children's care center. Consequently, we found that the “co-education” university curriculum required three points; 1) a study on growth and development that could provide the ability to look ahead and have a long-term perspective on children's growth process, 2) a pedagogy that fosters a zest for living through activity experiences, and 3) a teaching attitude that will encourage volunteers to become skillful and knowledgeable leaders who can

motivate children by viewing them not as objects of instruction but as fellow who should be respected.

大学生が知的障害・発達障害を持つ 子ども達と自然体験活動の支援を通して 共に学ぶ共育

渡 部 かなえ

1. 緒言

社会格差の拡大の影響を受けて子どもたちの間にも様々な格差が生じており、幼児期から小児期の自然体験をはじめとする体験格差も問題となっている¹⁾。特に障害を持っている子どもや生育環境に事情のある子どもは体験を通して学ぶ機会が極めて限られていることを政府も憂い、「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」(内閣府、2016)²⁾に基づいて休眠預金を活用した「体験格差解消事業」が実施された。

実際の事業展開は民間に委託して行われ、資金分配団体として政府に認定されたB&G財団が海洋性レクリエーション等の自然体験活動を通じて、子どもたちの心身の成長を促すとともに、体験格差解消の実現に向けた事業を行う実行団体を公募した。(B&G, 2020)³⁾。そこで選ばれた実行団体の1つである認定NPOは、B&G財団から資金の分配提供を受けて、児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたちを対象とした「みんなの海遊びプロジェクト」を実施した⁴⁾。

プロジェクトの終了時、保護者および児童デイケア施設のスタッフのほぼ全員から、このプロジェクトの有効性と必要性が高く評価され、そしてぜひ今後も継続したいという声が聞かれたが、政府の援助終了後は実施で

きなかった。

子どもの海辺の自然体験活動は安全確保が重要課題で、特に障害を持つ子どもたちの場合、健常児のプログラムよりも多くの人的サポートが必要である。「みんなの海遊びプロジェクト」では、子ども1名につき1名のサポーターがついてずっと一緒に海に入って活動し、知的障害・発達障害に加えて重度の身体障害も併せ持つ子どもにはさらに多くのサポーターが付き添った。また、個々の子どもたちに付き添うサポーター以外に、アクティビティ（「みんなの海遊びプロジェクト」の場合は、海水浴・泳ぐ・浮く・海辺の生き物観察・ボディボード（小型で軽量のサーフボード）、シーカヤック、大きなフロート（複数人の子どもが載っても浮いている浮き具）に乗る・フロートから海にダイブする、砂浜での砂遊び等、子どもたち一人一人がやりたいことをやる・チャレンジする）の提供とその安全な実施、および全体の安全管理を、海中と陸地（浜）の両方から担う自然体験活動の指導スキルを持った人的サポートが必要であるが、それを全て「ボランティア」として確保することは、保護者や児童デイケア施設のみでは困難であった。

ボランティアを確保するのはどうしたらいいか。これが障害を持つ子どもたちの体験格差解消プロジェクトを実施するうえでの大きな問題として浮かび上がってきたが、その解決方法の1つとして、学生が大学での教育の一環として参加することを、筆者らは考えた。大学での教育課程に組み込むためには、一方的な奉仕や人的資源の提供ではなく、活動に参加した学生の教育効果を保証せねばならない。発達障害や知的障害を持つ子どもたちとの自然体験活動を通して共に学び共に育つ「共育」で学生たちが身につけられることを、子どもたちの自然体験活動支援に初参加／経験が少ない大学生と、経験があるボランティアや児童デイケア施設のスタッフのアンケート結果の比較から検証することを目的として行った。

2. 方法

プロジェクト最終年度（2022 年）は、過年度と異なり、初めて参加／経験が少ない大学生ボランティアが大勢いたため、2022 年度に参加したボランティア・児童デイケア施設スタッフにアンケート調査への協力を依頼した。

2022 年度は海での活動が 2 回行われた（過年度は年 3 回）。参加者（児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたち）は 4 歳～17 歳の 24 名・25 名であった。

1 日の実質の活動時間は、過年度とほぼ同じで 90 分（事前のライフジャケット装着や水分補給、日焼け防止対策等の準備と事後のシャワーや着替え等を含めると 3 時間）であった。

調査は、オープンエンド型の質問（回答者本人および子どもの属性に関する質問のみ数値回答や選択肢式）・回答は自由記述、のアンケート用紙をボランティアと児童デイケア施設スタッフに配布し、回答への協力を依頼した。データの解析は質的データ解析プログラム KH-coder⁵⁾ を用いてアンケートの回答（自由記述）の頻出後の発言頻度と語句の関係性を示す共起ネットワークを作成し、その解釈を通して行った。

アンケート（＊）の主な質問項目は

- (1) 海遊びの前に、子どもたちに海遊びを通して、何を感じてほしいと思ったか、どんな体験をしてほしいと考えたか
- (2) 海遊びをする子どもたちを見て、感じたこと、考えたこと
- (3) 子どもたちの、海遊びの体験前と後を比較して

- (4) 海の体験は、子どもたちにどんな影響や効果をもたらすか。それは、いつごろ、どのような形で表れてくると思うか
- (5) 海遊びで、ボランティア・スタッフ自身、一番心に残ったことであった。（*アンケートの全質問は文末の添付資料に記載）

回答者数 32 名（うち大学生は 13 名）、回答率 97.0% で、経験のあるボランティアと児童デイケア施設スタッフのほぼ全員から回答を得ることができた。大学生の回答率は 100% であった。

3. 結果

(1) 図 1 は、海遊びの前に、子どもたちに、海遊びを通して何を感じてほしいと思ったか、どんな体験をしてほしいと考えたか、の解析結果（共起ネットワーク図）である。

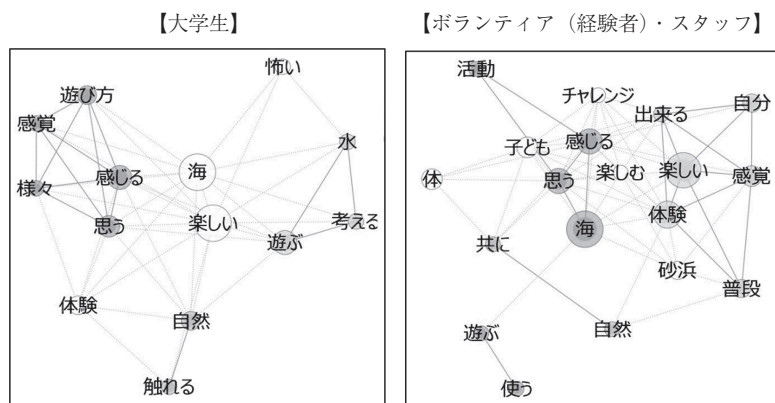


図 1 海遊びの前に、子どもたちに、海遊びを通して何を感じてほしいと思ったか、どんな体験をしてほしいと考えたか

経験がない・少ない大学生（以下、「大学生」と記載）も、経験がある

ボランティアや児童デイケア施設のスタッフ（以下、「経験者・スタッフ」と記載）も、活動に際し子どもたちに強く期待していたことは、「楽しんでほしい」であった。また自然に触れて様々なことを感じる体験も、大学生、経験者・スタッフ共に期待していた。

事前の期待には、両者に共通する点が多かったが、大学生にはなく経験者・スタッフにあったのは、子どもたちにチャレンジ（挑戦）してほしいという願いと、体験や楽しい気持ちを仲間と共有してほしいという思いであった。

(2) 図2は、活動中に、海遊びをする子どもたちを見て、感じたこと、考えたこと、の解析結果である。

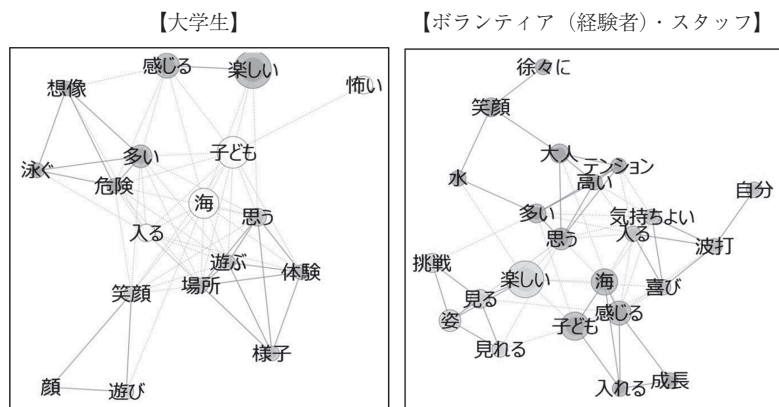


図2 海遊びをする子どもたちを見て感じたこと・考えたこと

大学生も経験者・スタッフも、子どもたちが笑顔で楽しんでいる様子を嬉しく思っていた。経験者・スタッフは、子どもたちが不安やちょっと怖い気持ちに打ち勝って様々なことに挑戦している姿に子どもたちの心の成長を見出しており、そんな子どもたちの姿を見られたことを喜ばしく感じ

ていた。一方、大学生は、子どもたちが挑戦する前に見せていた不安そうな様子や怖がっている様子に、自分たち自身も不安や心配な気持ちを抱いていた。

(3) 図3は、子どもたちの、海遊びの体験前と後と比較して、の解析結果である。

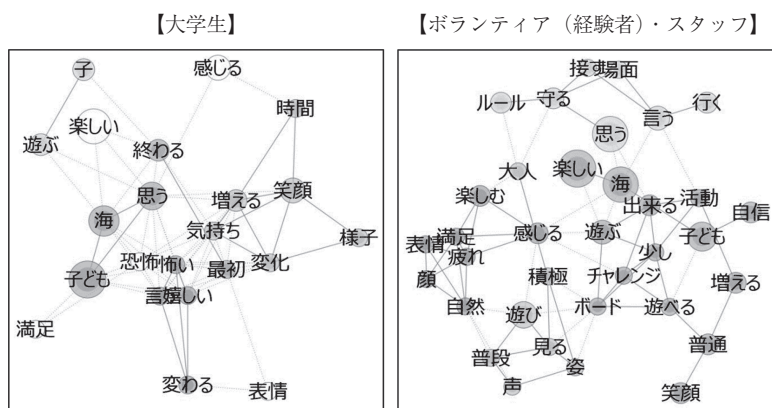


図3 子どもたちの、海遊びの体験前と後と比較して

子どもたちの海辺の自然体験活動の前と後と比較しての回答は、大学生と経験者・スタッフの両者とも、活動後の子どもたちが笑顔で、海遊びが楽しかったことが分かって嬉しく思っていた。大学生は、子どもたちが最初は不安な気持ちや怖さを感じていたけれど、時間をかけてそういうネガティブな気持ちが解消されていき、満足して活動を終えられたことを、子どもたちの表情や行動の変化から感じ取っていた。経験者・スタッフは、子どもたちが、チャレンジ精神や積極性を身につけたこと、「出来た」という体験から自信をつけたこと、ルール（約束事）を守って行動できるようになったことなど、子どもたちの成長を把握していた。また、活動後、

満足して楽しそうな表情の中に、普段とは異なる環境での新しい活動体験に疲れている様子も見取って、帰宅するまでの安全確保に、普通の日以上に注意を払っていた。

(4) 図4は、海の体験は、子どもたちにどんな影響や効果をもたらすか。それは、いつごろ、どのような形で表れてくると思うか、の解析結果である。

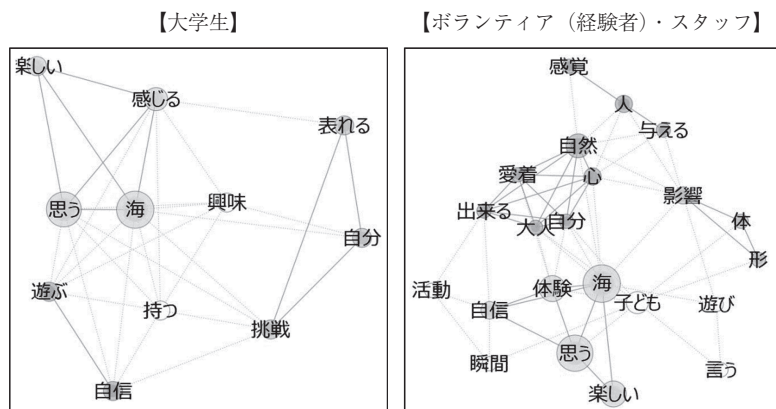


図4 海の体験は、子どもたちにどんな影響や効果をもたらすか。それは、いつごろ、どのような形で表れてくると思うか

体験活動の影響や効果の表れについての見通しは、大学生と経験者・スタッフで大きく異なっていた。大学生は、子どもたちが海で楽しく過ごせるようになる、自信を持ち挑戦できるようになるという効果あると回答していたが、それがいつごろどのような形で表れてくるかについては具体的な回答はなかった。経験者・スタッフは、子どもたちが、自分に自信を持って様々なことにチャレンジできるようになり、また、海（自然）を楽しめるようになるだけでなく、自然に愛着を持つようになり、感覚や体験を

通して得たものを他者と共有したり他者に与えることができるようになる
と考えていた。そして、それらの効果はいつ現れるかは子どもによって異
なり、いつかどこかで、それは大人になるまでだけでなく、大人になって
からも、心と体に現れてくると考えていた。

(5) 図5は、海遊びで、ボランティア・スタッフ自身、一番心に残ったこ
と、の解析結果である。

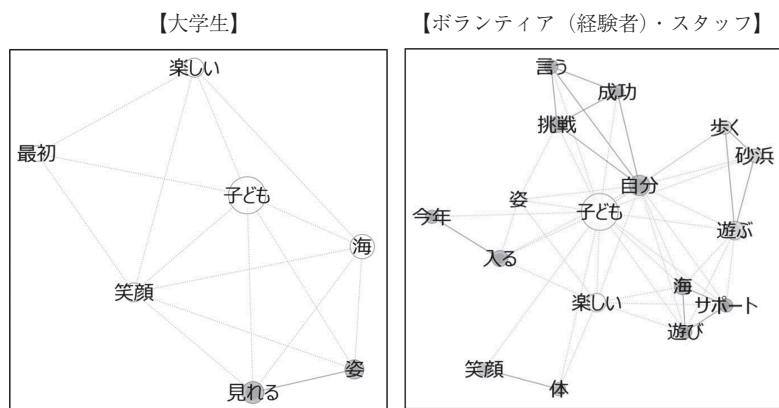


図5 海遊びで、ボランティア・スタッフ自身、一番心に残ったこと

心に残ったことも、大学生と経験者・スタッフで大きく異なっていた。
大学生は、子どもたちが笑顔で楽しそうだった、ということに尽きていた。
経験者・スタッフも、子どもたちが笑顔で楽しそうだったことは心に残っ
たが、それに加えて、過年度までは海に入ることもできなかった子どもも
最終年度は様々な活動に挑戦したこと、頑張ってそれを成功させたことな
ど、子どもたちの成長した姿を見ることができたことが心に残っていた。
また、感覚過敏で砂が足に触る感覚を気持ち悪いと感じて短距離であって
も砂浜を歩くことを嫌がっていた発達障害を持つ子どもが、足に砂が触る

感覚が気持ち悪いことには変わりはないけれど、少し我慢して歩けば、海に入れて気持ちがいいし海で遊べて楽しいからと頑張って砂浜を歩いたことを心に残ったこととしてあげていた。さらに、子どもたちの海遊びをサポートできたこと自体を、有意義で心に残る体験活動であったと捉えていた。

4. 考察

アンケート調査結果の全体を概観すると、大学生に比べ、経験者・スタッフは、多角的・複合的で長期的な視点を持って様々な観点から子どもたちをよく見ていた。

大学生と経験者・スタッフで特に結果の差が大きかったのは(4)の「海の体験は子どもたちにどんな影響や効果をもたらすか。それはいつごろ、どのような形で表れてくると思うか」という、未来への見通しを問うた質問への回答と、(5) ボランティア・スタッフ自身の一番心に残ったこと、であった。

(4)の海の体験の効果がいつごろどのような形で表れてくるか、については、経験がない・浅い大学生には、海でいろいろなことをやって楽しそうだった、自分にもできて嬉しそうだったという観察から、海(自然)を楽しめるようになること、自信を持つこと、挑戦できるようになるという効果は想像できたようであるが、その効果が表れる時期や場面、状況は見当がつけられないようであった。経験者・スタッフは、海(自然)を単に楽しむだけでなく、愛着を持って大切に思うセンス・オブ・ワンダー⁶⁾を育む効果や、感じ取ったことや体験を仲間と共有する心の育ちなどが効果として現れてくると考えていた。また、効果が現れるタイミングは一人一人の子どもそれぞれで、一瞬一瞬の体験やその時の思いが子どもの心に積

み重なって行って、大人になるまでの、いつか・どこかで、場合によっては大人になっても、心と体の成長として現れてくると捉えていた。すなわち、大学生はその場・その時だけを見ているが、経験者やスタッフは、子どもたちが大人になるまでの成長の過程を見通せる長期的な視野と展望をもって子どもたちの活動支援を行っていた。

(5) のボランティアやスタッフ自身の心に残ったことについては、経験がない・浅い大学生は、子どもたちが楽しそうだったことに尽きていたが、経験者やスタッフは、それに加えて子どもたちの頑張る姿勢や成長した姿が見られたことを嬉しく思い、心に残ったこととしてあげていた。また、そんな子どもたちの楽しい体験と成長の機会の支援ができたことに喜びを感じていた。一方的な与える側→受ける側、ではなく、支援される側（子ども）と支援する側（ボランティア・スタッフ自身）の両者に、ボランティア活動の意義とメリットがあることを自覚している点が、経験者やスタッフにはあって大学生にはない視点であった。

また、大学生も経験者・スタッフも、子どもたちの挑戦する姿を成長ととらえていた。しかし、大学生はボードに乗って波乗りをしたり、浮きから海に飛び込むなどの分かりやすい挑戦には気づいていたが、経験者やスタッフはそれだけでなく、「砂が気持ち悪いけれど、少し我慢して歩けば、その後、海に入れて気持ちがいいし楽しいから頑張って砂浜を歩く」などの、派手さはないけれど、子どもにとっては「見通しを持って行動する」という、生きていく上で大切な「生きる力」⁷⁾が育っていることに気づいていた。こういった、小さくささやかだけれど大切なことに気づけるようになると、ボランティアとしての支援活動を携わることの意義と効果をより深く広く理解でき、さらなる活動支援への積極的な参加に繋がっていく。

これらのことから、大学で行う、発達障害や知的障害を持つ子どもたちとの自然体験活動を通して大学生が共に学び共に育つ「共育」の教育課程

には、自然体験活動のスキルや、活動に際して危険から子どもたちも自分たち自身も守れる安全管理の知識と技術の習得に加えて、先を見通す力、その場限りではなく、子どもたちが大人になるまでの成長の過程を見通して考えたりできる長期的な視野と展望を持つことができるよう、心と体の発育発達について学習できるカリキュラムにする必要がある。また大学生だけでなく、子どもたちにも「楽しい」だけで活動を終えてしまうのではなく、「先を見通す力」をはじめとする「生きる力」⁷⁾を活動を通して育んでいくための教育学の学びもカリキュラムに組み込む必要がある。

子どもの自然体験活動の支援を通して成人のボランティア指導者に生じる変化についての先行研究でも、ボランティアの研修では、技術だけでなく、子どもを「指導対象」ではなく「共に活動する仲間」としてとらえ「尊重すべき対象である」と考えて子どもたちのモチベーションを上げる指導者となれるよう「指導の姿勢」も学ぶ必要があることが明らかにされている⁸⁾。

体験を通した学びの重要性と、子どもたちのその機会が減っていることの問題点が文部科学省によって指摘されているが、障害を持つ子どもたちは支援の手が足りないために体験の機会をさらに得ることが難しい。大学生もまた、特にこの数年間は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、体験を通した学びの機会を十分に得ることができていない。本研究で得られた成果からは、大学生と知的障害・発達障害を持つ子ども達が自然体験活動を通して共に学ぶ共育に必要な基礎的な知見を得ることができた。

5. 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 23K02319 の助成を活用して行いました。またデータの入力・整理で墨田雪香さん（神奈川大学）にご協力いただきました。

た。

【添付資料】アンケートの全質問

1. あなたの 年齢（ 才）、性別（男・女 ：○をつけてください）
2. あなたが今日、主に担当したお子さん。
年齢（ 才）又は（小・中・高校 年生）、性別（男・女）、全体把握のため担当無し
3. 今回の海遊びの前に、子ども達に海遊びを通して何を感じてほしいと思いましたか、どんな体験をしてほしいと考えましたか。
4. 海遊びの開始前に、子ども達は海遊びで、どんな動き・どんな表情・どんな反応をすると想像しましたか。
5. 海遊びをする子ども達を見て、感じたこと、考えたことを書いて下さい。
6. 今日の海遊びを経験し終えた子ども達について、感じたこと、考えたことを書いて下さい。
7. 海遊びの前と後で、子ども達はどんなふうに変わったと思いますか。
（特に変わらなかったと思う場合は、そう書いて下さい）
8. 今日の海遊びで、あなた自身、一番心に残ったことは、どんなことですか。
9. その他、何でも。

【参考文献】

1. 産経新聞、2018年2月14日、経済格差が幼児の自然体験などにも忍び寄る、<https://www.sankei.com/article/20180214-JQTGBURC4FMSTJGIBWJPRN7LX4/>、（閲覧：2023年9月8日）
2. 内閣府（2016）、民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律、

- https://www5.cao.go.jp/kyumin_yokin/law/law_index.html（閲覧：2023年9月8日）
3. ブルーシー・アンド・グリーンランド財団（B&G 財団）（2020）、休眠預金を活用した体験格差解消事業の「事業者（実行団体）」公募のご案内、（閲覧：2023年9月8日）
<https://www.bgf.or.jp/kyuminyokin/koubo.html>
 4. 認定 NPO 法人オーシャンファミリー（2020年7月14日）、【休眠預金】実行団体に選ばれました！ <https://oceanfamily.jp/2020/07/41499>（閲覧：2023年9月8日）
 5. KH Coder, <https://khcoder.net/>（閲覧：2023年9月8日）
 6. Carson R. (1998), The sense of wonder, HarperCollins Publishers, New York.
 7. 文部科学省（2008）、生きる力」と資質・能力について、資料11 「生きる力」と資質・能力について（平成20年中央教育審議会答申抜粋）、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（平成20年1月17日中央教育審議会答申）」関係部分抜粋、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/attach/1329017.htm,（閲覧：2023年9月8日）
 8. Kanae Watanabe, Effects of career length of adult amateur volunteer leaders on children's activities in a natural environment, 3rd Online Conference on Multidisciplinary Academic Research (OCMAR-2021) proceeding, Asia Pacific Institute of Advanced Research (APIAR), pp. 22-28, 2021.